THE AMERICAS TODAY

天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 86　　2022 年 6 月

Special to the Newsletter

暦で解き、暦で示すアメリカス

中牧　弘允

かつて本誌に「宗教と民族で解くアメリカス」という巻頭言を寄稿したことがある（No. 15, 1997 年 3 月）。その際には宗教対立や民族紛争を取り上げたが、今回はむしろ暦が文化や文明の共存をはかる媒体として意味をもつことに注意を喚起したい。対立を扇動するのではなく、共存を自覚するメディアとしての役割である。

暦は年・月・週・日あるいは二十四節気などを知るために存在するが、天文学的な情報にとどまるものではない。大安や仏滅などの暦注を行動の指針としたり、国民の祝日やバレンタインデーなどの記念日を祝ったりもするからである。また写真や絵画から商店の広告にいたるまで人文学的情報も提供している。つまり暦は天文と人文を兼ね備えた媒体なのである。くわえて、明治改暦を例にとれば、中国文明からの離脱と西洋文明への転換を画する象徴でもあった。しかし、同時に明治新政府は神武天皇即位紀元（皇紀）を採用し復古主義的な精神を涵養して、日本独自の文化を強調したことも忘れてはならない。時と次第によっては、暦は文明と文化を両天秤にかけるようなことに使われたりもするのである。

写真 1　アステカの暦石（複製）
＠民博アメリカ展示

アメリカスにおいても暦は文明や文化を紐解く素材として重要である。アステカの暦石はメキシコ国立人類学博物館の目玉展示であり、かつてのアステカ文明を彷彿とさせるシンボルでもある。アステカ文明やマヤ文明は独自の時間観や宇宙観、歴史観をもち、それが暦石や石碑に刻み込まれていた。現代においても、「アンデスの暦」と命名されたレリーフの板絵（レタブロ）には、「東

写真 2　アンデスの暦（国立民族学博物館提供）

宝の三博士」（1 月）から「家畜増殖儀礼」（3 月）、「コンドル・ラチ（コンドルと闘牛）」（7 月）、「種まき」（9 月）、「クリスマス」（12 月）にいたるまで、「月次絵」のように描かれている。ここには先スペイン期と関連する儀礼とキリスト教の行事、そしてコンドル・ラチのようなアンデス文化とスペイン文化の融合した祭りが共存している。この板絵は国立民族学博物館（民博）に展示されているが、インカ文明とヨーロッパ文明の対立・共存・融合の諸相を読み解く資料として貴重である（藤井龍彦 2019「アンデスの暦とインカの暦」『季刊民族学　特集　暦をめくる、世界をめぐる』168、千里文化財団、18-23 頁）。

民博のアメリカ展示場には「グローバル時代の諸宗教」と銘打って筆者が担当したコーナーもあり、カレンダーでそれを表わしている。カトリック教会のカレンダーには教会暦をクリスマス・レント（四旬節）・イースターなどの聖なる時期と、それとは逆の俗なる時期とを分けるユニークなカレンダーもあれば、ブラジルの日系と韓国系の教会カレンダーもあり、またメキシコのグアダルーペの聖母をあしらった定番もあり、多様性に富んでいる。プロテスタントに関してはアメリカのラジオ放送局のものと韓国系教会のものが並べられている。ユダヤ教やイスラームのカレンダーもあるが、力を入れたのは日系宗教のそれである。ハワイの西本願寺、南米の東本願寺、南米の生長の家、そしてブラジルの天理教カレンダーである。コーナー全

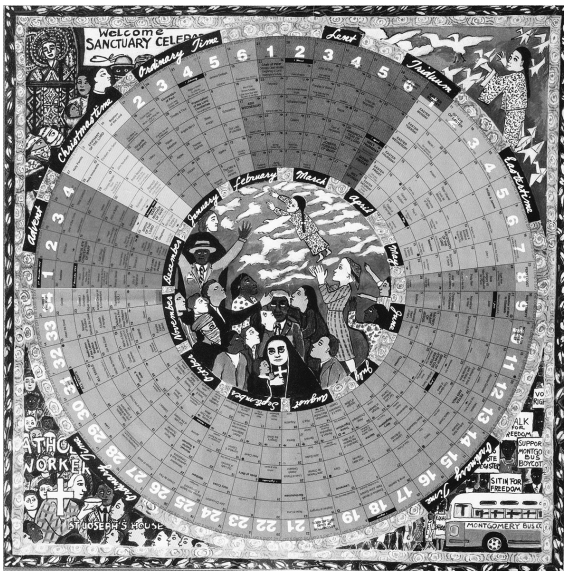

写真 3　シカゴ大司教区のカレンダー
（国立民族学博物館提供）

体としては大西洋からだけでなく、19 世紀後半以降はとくに太平洋からもアメリカスの文化・文明に参加したことを意図的に示そうとした（中牧弘允 2021「民博における暦の収集から展示まで」『季刊民族学　特集　暦をめくる、世界をめぐる』168、千里文化財団、78-82 頁）。

さらに、暦で示すアメリカスの例として 2020 年の暦文協オリジナル・カレンダーについても紹介したい。これは日本カレンダー暦文化振興協会（暦文協）が発行するややマニアックなカレンダーである。2020 年版は「アメリカスのカレンダー」と題して、アメリカ、メキシコ、グアテマラ、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、エクアドル、ブラジル、パラグアイの 8 ヵ国を取り上げ、それを 12 ヵ月に振り分けて解説文を執筆した。先住民に関するものが 3 ヵ月、日本人を含むアジアからの移住にかかわるものが 4 ヵ月あり、ヨーロッパ中心ではないアメリカスの文化・文明のありように注目した。そのうちのひとつは戦時下に日系人の公民権を主張して逮捕され、有罪となったフレッド・コレマツのものである。戦後、その有罪判決は覆り、かれは名誉を回復したばかりか、カリフォルニア州やハワイ州などでは誕生日に合わせて「フレッド・コレマツ・デー」という記念日すら創設されたのである。

写真 4　グローバル時代の諸宗教＠民博アメリカ展示

以上、暦やカレンダーは暦日情報だけでなく、文化や歴史、宗教や人権など、さまざまな情報を発信するメディアの役割を果たしていること、またそれを読み解くだけでなく、展示やカレンダー制作を通じて情報を提供しうることを指摘した。カレンダーは役目が終われば使い捨てられる運命にあるが、次々に未来を先取りして作り替えられる存在でもある。暦は実は未来志向の強いメディアであって、たんなる日用品ではない。アメリカスに限らず、世界の動向をカレンダーから読み取る知的な楽しみを提供してくれるばかりか、未来を切り開くパイオニアとしても捨てがたい価値をもっているのである。

（なかまき・ひろちか／国立民族学博物館名誉教授）

Scenery

文学の中のアメリカ生活誌（77）

新井　正一郎

The Gay 9Os（楽しい 90 年代）フロンティアに代わるべき急激な産業経済が生み出した 1890 年代のアメリカは、政府による自由放任主義の安易な正当化とあいまって、政治的、社会的に、また経済的にも危機感を深めていた。まず深刻な不況下のアメリカ史上最も激しい闘争的なストライキが頻発した。なかでも 1893 年の労働者の一時解雇と賃金カットから生じたピッツバーグにあるカーネギー鉄鋼会社の広大なホームステッド工場のストライキは、工場労働者と会社側の呼び入れた 500 人のピーカートン探偵社の探偵や州兵との抗争で血なまぐさいものになった。シカゴ郊外の企業町で豪華客車を供給していたプルマン車両会社の 1894 年に始まったストライキは、69 万人の労働者が参加した大規模なものだったので、おびえた第三者には、アメリカの産業化都市は今や激しい生存競争が支配するジャングルに陥ったと思われた。プルマンのストは後に社会党党首になるユージン・デブスの指導する米国鉄道組合の同調ストを引き起したので、鉄道の 3 分の 1 が停まった。おりしも世間は銀本位制をめぐって対立していた。民主党大会で大統領候補に指名された人民党員のウイリアム・ブライアンは「金の十字架」という名演説で選挙戦を闘ったが、共和党候補のマッキンレーに敗れた。1893 年にはアメリカの金保有量が 1 億ドル以下に下落してしまったため、アメリカは全国的な経済的破綻に見舞われた。この間株式市場が崩壊し、大量の銀行や企業の倒産と共に、広範な失業が生じた。1893 年の不況は 1929 年の大不況に次ぐ恐慌だったので、コクシー軍がワシントンへ行進する事態が生じた。コクシー軍とは政府に救済を求め、オハイオ州の砕石場主であった人民党員のコクシーに率いられて首都ワシントンへ向かった 500 人の失業者達である。さらに対外関係に目を向けると、スペイン領キューバ解放という理想のもとに 1898 年に始めた米西戦争という危機の時期があった。批評家ノーマン・フォースターの言葉を借りると「血のにおいがジャングルににおうように」、経済復興したアメリカは帝国的な味を求め始めたのだ。経済が復興したアメリカは再度帝国的姿勢を強め始めたのである。戦争の結果、アメリカはプエルトリコとフィリピンを領有した。

文学でもこの時代の自然主義派の主要な作家たち（スティーヴン・クレイン、フランク・ノリス、セオドア・ドライサーなど）は、前の金めっき時代のおとなしいリアリズムに反旗をひるがえした。彼らはこの頃広まったイギリスの哲学者ハーバート・スペンサーの社会進化論（ソー

シャル・ダーウィニズムとも呼ばれる）の影響を受け、いち早く産業社会の暗い、不愉快な現実―あらゆる人間を操り人形の状態にする本能や環境という個人の意志では統御できない自然の力―をテーマにした。暴露作家アプトン・シンクレアの『ジャングル』(1906) は、豚の屠殺場、缶詰工場の不潔不衛生ぶりと、それを取り巻く都市シカゴの悲惨な状況を暴露したので、当時の読者の怒りをかき立てた。

もっとも 1890 年代のアメリカ人の暮らしが労働争議や戦争など暗いことばかりであったというわけではない。楽しいことや愉快なことが沢山あった時代でもあった。戸外のレクリエイションとしてボート、テニス、ゴルフ、野球、競馬が流行し、夏になると中産階級の多くは山や海で長い休暇を過ごすことを計画した。冬になると人々は　ブロードウェイの歌劇場、オペラ館、ダンスホールへ繰り込んだ。アメリカの都市化を推し進めたものは、高層建造物、通信制度、公共交通機関などだが、特に路面電車の登場は都市の姿を一変させた。ニューヨークを例にとると、19 世紀の中頃からニューヨーク市の街路には馬や蒸気、後には鉄道馬車という輸送機関が中央部に向かって走っていたので、交通渋滞を起こしていたが、そこには消費指向の中産階級のアパートや商業施設があり、その近くにガス工場や倉庫、さらに隣接して貧しい者や新来の移民用のごみごみした棟割長屋が建てられていた。ところが 1880 年代から 1890 年にかけて、中心部に客を運んでいた電動式の路面電車が、周辺部（後に郊外と呼ばれることになる）に路線を延ばすようになると、アパート居住者の都市ニューヨークは変貌する。もう少し言うと、この時期には上流中産階級のなかには、身元も知れぬ人たちの近くで暮らすことを気にする者が多くでてきた。彼らは居心地の良さを求めて閑静な郊外に移動するようになる。今やニューヨークは豊かな郊外居住者の都市になったのだ。90 年代に流行った乗り物に summer cars（夏用電車）という都市と田舎を結ぶ電車があった。裕福な人はこの電車で避暑地に出かけた。1880 年代に登場した大量の通勤客を運ぶ高架鉄道は、地上約 10 メートルの高さを走るので、街路はいつも薄暗かった。とはいうものの「エル」(el) という愛称で呼ばれたこの新しい乗り物はほかで味わえない情景を与えてくれた。前記ハウエルズの『新しい運命の危機』に出てくるマーチン夫妻は、ボストンからニューヨークに来ると、ニューヨークの眺望を求めて、高架鉄道に乗りたいとこういう。「ワシントンスクエアの角とクーパー研究所のカーブ、あれは世界で最も愉快な所だよ」。マーチン氏のように、実に多くの人が楽しさを感じていた時代だった。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

南北戦争後のブラジルにおけるアフリカ系アメリカ人の記憶―2つの奴隷制の狭間で―

中西　光一

南北戦争（1861-1865）以前のアメリカでは、自由黒人の国外移送運動がアメリカ植民協会（American Colonization Society）によって推進されていた。その背景には、白人至上主義に基づく白人ナショナリズムの思想や優生学の勃興、奴隷の反乱を危惧するハイチアニズム（Haitianism）（cf. Walker, 2001）の影響があった。そして、1822年にアフリカ系アメリカ人によるリベリア（西アフリカ）の入植が実現した。また、1850年代には海洋学者のマシュー・フォンテーン・モーリーがブラジル・アマゾンの植民計画を考案した。アマゾンの計画は、黒人奴隷を当地に入植させて「スレーブ・インペリアリズム（slave imperialism）（cf. Horne, 2007, p. 109）」を形成するという南部の大奴隷主の戦略でもあった。しかし、ブラジル帝国は「白人化」を目指し白人移民の受け入れを促進していたために、モーリーの計画は失敗に終わった。

その後、1862年のエイブラハム・リンカーン政権時代にブラジル駐在米国大使ジェームズ・ワトソン・ウェッブは、解放奴隷によるアマゾンの植民計画を大統領に提案した。その背景には、奴隷制廃止後に生起する「人種混淆（miscegenation）」の問題と、白人種の退化を阻止する狙いがあった。だが、ウェッブの計画もブラジル帝国が白人移民を切望していたことから軌道に乗ることはなかった。戦後の再建期には「再建期修正」が制定されて、アフリカ系アメリカ人の基本的な権利が保障された。そのため、「コンフェデラードス」と呼ばれる一部の南部白人は解放奴隷を連れて奴隷制を維持していたブラジルへ移住した。事実、その数はきわめてわずかであったため、彼らについてはほとんど知られていない。

本報告では、解放奴隷のスティーブ・ワッソン（Steve Wasson）に焦点をあて、彼が置かれていた状況について検証した。彼は、1867年に元主人のジェームズ・ダイアーとその家族と共にテキサス州ヒルズボロからサンパウロ州ヴァーレ・ド・リベイラ地方の南部人植民地に移住した。しかし、ジェームズの妻アマンダの死やダイアー家が設立した会社の失敗などの不幸が続いて、ダイアー家は1872年に帰国を余儀なくされた。その後、ワッソンはダイアー家の会社とその土地を譲り受けて白人のジョアキン・アドルノの庇護の下会社の再生を成し遂げた。そして同時に、ワッソンの名はブラジル化してヴァソン（Vassão）となり、アドルノの息子ジョアンがその名を受け継ぎ、ジョアン・アドルノ・ヴァソンと名乗るようになった。スティーブの歴史的経験を鑑みれば、彼の特異性は当時のアフリカ系ブラジル人の多くが享受することを許されなかった会社と土地を所有した点と、奴隷制の時代に白人のブラジル人がアメリカ人の解放奴隷の名を受け継いだ点であった。

最後に、参加者からワッソンに関する質問や意見が寄せられた。ブラジルの人種問題とその構造に注目したミルトン・サントスとジルベイト・フレイレの人種観とワッソンの事例との関係性や、彼の行為は黒人であることを隠し、白人として生活したパッシング（passing）の事例ではないかという指摘であった。これらの意見を契機に、パッシング

の可能性やワッソンの経験を 19 世紀後半のブラジルの人種問題と結びつけて検証することを今後の課題としたい。

［参考文献］
Horne, Gerald. 2007 *The Deepest South: The United States, Brazil, and the African Slave Trade*. New York: New York University Press.
Walker, Sheila S. 2001 *African Roots/American Cultures: Africa in the Creation of the Americas*. Lanham, MD: Rowman and Littlefield.
（サンパウロ大学博士後期課程・近畿大学 非常勤講師）

ブランド名の強勢位置―英語の歴史的そして音韻的要因からの一考察―

山本　晃司

はじめに

特定の位置に語強勢がくる言語もあれば、どの位置に語強勢がくるのか断言できない言語もある。かつての英語は前者寄りの言語であった。しかし、様々な言語から大量の語彙を借用した結果、現代英語における語強勢の位置は “chaotic” (Frudge, 1984: 4) とまで言われる状態になっている。本発表では時間的制約もあることから、英語の語強勢における歴史を概観したのち、いくつかの条件に合ったブランド名（Jaguar, Reebok, Yogibo など）の強勢位置を中心に分析を行った。結論として、今回の言語資料に関しては第 1 音節に強勢が置かれるブランド名が多いことを指摘した。

古英語と中英語における強勢位置

そもそも英語はゲルマン語派に属し、その主たる言語的特徴の 1 つは第 1 音節への強勢にあるとされている (Prins, 1974: 33)。19 世紀の著名な言語学者の一人であり、音声学者としてよく知られる Henry Sweet (1900 [1892]: 243) も古英語の言語特徴としてこの点を挙げている。しかしながら、中英語に入ると接頭辞による強勢位置の後退、つまり、第 2 音節への強勢移動が一部の語で見られ始め、さらには強勢が語の右側に来る特徴を持つロマンス系の諸言語、特にフランス語の大量流入があった結果、ゲルマン語の強勢規則 (Germanic Stress Rule、略して GSR) がロマンス語の強勢規則 (Romance Stress Rule、略して RSR) の勢いに押される形になり、今では両規則が混在する状態となっている。この状況は時に論争を引き起こすこともある。例えば、Olausson and Sangster (2006) は BBC（英国放送協会）に寄せられる発音の苦情の 1 つに “controversy” の強勢位置を挙げ、BBC ではゲルマン語派の伝統を引き継いだ CONtroversy を推奨しているものの、conTROVersy も広く使われていることを認めている。

ブランド名における強勢位置の考察

ブランド名の強勢位置を調べる際に使用した言語資料は YouTube 上の “Pronounce Top 50 Brand Names in English” (16 October 2020)【米国人女性話者】そして『国際的なブランドの名前 100 ? アメリカ英語の発音』(28 November2017)【米国人男性話者】の 2 つである。合計 150 のブランド名となるが、重複しているブランド名、1 音節のブランド名（1 音節はその音節にしか強勢が来ないため）、複合語 (Coca Cola, Red Bull など）のブランド名、頭文字語 (IBM, H & M など）のブランド名は除外し、2 音節以上のブランド名

92 個を調査対象とした。

音節数を見ると、2 音節のブランド名が 58 個 (63%)、3 音節のブランド名が 29 個 (32%)、4 音節のブランド名が 5 個 (5%) となっており、今回の言語資料に限って言えば、2 音節のブランド名が多くを占めている。次に、音節数と強勢位置の関係について見ると、2 音節のブランド名では 56 個（97%）が第 1 音節、2 個 (3%) が第 2 音節であった。3 音節のブランド名では 16 個(55%)が第 1 音節、11 個 (38%) が第 2 音節、2 個 (7%) が第 3 音節となった。最後に 4 音節のブランド名では第 1 音節への強勢はなく、第 2 音節に 2 個 (40%)、第 3 音節に 3 個 (60%) となった。小規模な調査結果ではあるものの、GSR そして RSR の観点から分析しても第 1 音節に強勢がくるブランド名が多くある一方で、3 音節以上のブランド名になると、やや RSR 寄りの強勢位置になる傾向が見受けられた。また、RSR の規則、または GSR と RSR の規則にもそぐわない強勢位置のブランド名もあり、強勢規則以外の別要因も考慮する必要性が見えてきた。

［参考文献］

Fudge, Eric. (1984) *English Word-Stress*. London: George Allen & Unwin.

Olausson, L. and Sangster, C. (2006) *Oxford BBC Guide to Pronunciation*. Oxford: Oxford University Press.

Prins, A. A. (1974) *A History of English Phonemes*. 2nd ed. Leiden: Leiden University Press.

Sweet, Henry. (1900 [1892]) A *New English Grammar: A Logical and Historical*. Vol. 1. (Original work published in 1892, Oxford University Press). Oxford: Clarendon Press.

（天理大学国際学部 准教授）

お知らせ

◇来る 7 月 16 日（土曜日）午後 1 時から次回定例研究会を開催する予定です。詳細は 6 月末に本学会ホームページに掲載します。多数のご参加をお待ちしています。

◇学会誌『アメリカス研究』（電子ジャーナル）は本年も 11 月末に第 27 号の刊行をめざして準備を開始しております。ご投稿をお考えの会員諸氏におかれましては、投稿規定ならびに執筆要項を学会ウェブサイト上にて 7 月初旬にはご案内させていただく予定です。この機会に日頃のご研究成果をぜひともお寄せいただけましたら幸いに存じます。

◇当学会の年会費は、一般会員は 5,000 円です（入会金はありません）。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年 1 口 3 万円です。

編集後記

◇今号は、第 26 回年次大会（2021 年 12 月 4 日）での記念講演と研究報告の要旨を掲載しています。中牧弘允先生にはご執筆に加えて民博の資料特別利用申請の労も執っていただきました。記して感謝申し上げます。日本でも入国規制が緩和されるようになりました。そろそろ海外出張を考えてもよさそうな気配がしています。

☆新入会員：

荒田　恵（2022 年 4 月入会）

天理大学アメリカス学会ニューズレター
（No. 86：2022 年 6 月 23 日発行）
発行者：山田政信
〒 632-8510　天理市杣之内町 1050
天理大学アメリカス学会
電話：0743-63-9076
Fax：0743-62-1965
e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp
http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/